◇夢色童話◇

無色サイダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
◇夢色童話◇

【Ｎコード】
Ｎ８４７１Ｃ

【作者名】
無色サイダー

【あらすじ】
物語の登場人物達が、その場所へと迷い込んだ時、童話の真実が見えてくる。

◆
◆

とある世界のとある国、その中でも一際小さく地図にすら乗らないどこかの村に、名も無き大きな森があるそうです。
そしてその森の奥深くに、一軒の古い店があり、そこに青年が一人で住んでいるそうな。彼は、道に迷い疲れ果てようやくここに辿り着いた旅人を暖かく迎え、そして彼らの話を聞きながら一緒にお茶を飲むんだそうです。旅人たちは皆、青年と同じ時間を過ごすうちに、満ち足りた気分で眠りにつき、そしてとても幸福な気持ちで帰ってゆくらしいのです。
けれども彼らが……――おっと、話の途中ですがまた一人迷い込んで来たようです。この続きは、彼女と一緒に知る事にしましょう…。

――いらっしゃいませ、名も無き森の喫茶店“トランシェント”へようこそ――

白の童話

その女は絶望の淵にいた。大切な一人娘に裏切られたのである。泣きはらした目は醜く膨れ、行く当てもなくけわしい森を彷徨い歩いたせいで、体中は傷だらけであった。それでも彼女は気にも止めず、ひたすら歩き続けていた。ふらふらとよろめきながら、時たま足をもつれさせながら。

するとそのうち、歩みを邪魔していた木々達が突然途切れた。暗い森を抜け、太陽の日がさんさんと注ぐ空間に出たのである。

美しい花が色とりどりに咲き、小鳥が優雅に歌っていた。その中心に、小さな木の小屋があった。洋風のそれは本当に小さく遠慮がちで、まるで自分はこの素晴らしい空間を際立たせる脇役の一つでしかないのだと。あくまでも引き立て役なのだと。そんな事を言い出しそうな、独特の不思議な雰囲気をかもし出していた。

突然現れた何とも場違いな景色に、最初女はここが天国だと思った。

「ああ、ついに私も死んでしまったのね。けれどもこんな素敵な場所ならば、その方が幸せかもしれない……」

女がそう呟いた時、小屋の扉がきぃ、と微かな音を立てて開いた。そして中から誰かが出てきて女に何か声をかけた――けれどその時女はすでに意識を失いかけていたので、現れたのがごく普通の若き青年で、同じような仕事をしている者ならば誰しもが当たり前のように口にする挨拶をしたのだとしても、彼女には遠く不確かな天からの使いにしか思えなかった。

すなわち彼はこう言ったのである。

「いらっしゃいませ、お客様でしょうか？」

女が眠りから覚めた時最初に耳に入ったのは、お湯が沸いたぞと主張するあの、シュンシュンという合図だった。ついで聞こえる誰かの慌てた声。

「熱っ熱っ」

ヤカンの蓋が下に転がり落ちた時のかんかららん、という少々やかましい音。

女はまぶたをゆっくりと開き瞳を左右に動かすと、自分が部屋のベッドに寝かされていたのだという事を知った。そっと体を起こし両手を動かしてみる。――まだ生きている。

「ここは……」

女が小さな口を開いたその時、彼女の右側にあった引き戸が勢いよく開いた。

「気がついた!?」

思ってもみなかった突然の大声に、女は驚き目を丸くした。そこにはまだ２０かそこそこの青い髪をした青年が、湯気の立つカップを２つ乗せたおぼんを持って戸口で笑っていた。

「あのっすみませんここは……」

慌ててよろよろと立ち上がり、髪や洋服の乱れを直す女に、青年は左手のひらを突き出し強く制し、当然のように言った。

「だめだよ。知らない人と話す時は、まず最初にお互い名のりあわなくっちゃ」

そしておぼんをベッドのすぐ側にあった低いテーブルの上に置き、あっけにとられて固まっている女に向かって頭を下げた。

「いらっしゃいませ、名も無き森の喫茶店“トランシェント”へようこそ。僕がこのお店の主、名前はテルマン。お気軽にテルとお呼び下さい。よろしくどうぞ」

まるで前々から準備をしていたように、そう言うのが決まりであるかのように、彼はすらすらと一気にしゃべった。そして下げた頭を少しだけ上げると、ぽかんとしたまま動かない女に微笑みかけ、次はあなた、と深く透き通る青い瞳で合図した。女はつい姿勢を正し、テルマンと名のる青年にならい頭を下げた。

「わ、私はエレナ。森を歩いていて気がついたらここへ……あら？いつの間に森なんか入ったのかしら」

「ふむふむ、まぁそちらにお掛けになって。ここは喫茶店、お茶でも飲みながらゆっくり語り合う所です。慌てず騒がず一つ一つ丁

寧にいきましょう」

頭を抱え困惑する女――つまりエレナを青年テルマンがなだめ、先ほどおぼんを置いたテーブルと2つの椅子の方に手を差し出した。エレナは言われるがままに窓際の椅子に腰掛けた。カップからは紅茶のいい香りが漂ってくる。

「紅茶はお好き？」

「ええ、とても。いい香り……落ち着くわ」

「きっと好きだと思ったんですよ」

「ふふ……ありがとう」

エレナは嬉しそうに微笑んだ。その上品さから察するに、どこかのお姫様かお嬢様だろうか。けれどもその格好は決して綺麗とは言えず、まるで魔女のような黒いローブをまとっている。そして森を右往左往に走ってきたせいか、あちこちに破れや泥が見られた。

ふ、とエレナの微笑みが固まり、その表情は哀しみへと変わっていった。テルマンは、うつ向き沈む彼女の顔を、心配そうに覗きこみ言う。

「あなたの不幸を、どうか私に話して下さいませんか？」

それはエレナに頼んでいるようにも、提案したようにも聞こえ、断るという選択肢も十分にあった。けれど彼の暖かい気持ちが、とても優しく彼女の心に染み渡っていったので……エレナは一粒の涙と共に、ぽつりぽつりと話をし始めたのだった。

1．孤独なふたり

昔、あるところにお城があり、王様とお妃様が住んでいました。
そのうちお妃様はとても可愛いらしい女の子を産みました。しかし、もともと体の弱かったお妃様は、出産から間も無くこの世から去ってしまいました。
しばらくすると王様は、新しいお妃様を迎え入れました。新しいお妃様は、産まれたばかりでまだ名のなかったお姫様に、こう名付けたのです。

――白雪姫、と。

◇　◇　◇

白雪姫はどんどん美しく成長していきました。その名にふさわしく、透き通るほど真っ白な肌に艶やかに映える桃色の頬。くりっと丸く大きな目は漆黒に輝き、真っ赤な唇はいつでもみずみずしい。
王様はこの美しい娘を溺愛しました。みかけはもちろん、内面も素直で物腰柔らかく、何者にも隔てなく優しい。白雪姫はそんな少女だったのです。

――いいえ、そんな少女であらねばならなかったのです。なにしろ一国のお姫様であり、ただ一人の後継ぎでしたから。その責任は、小さな白雪姫にとっては、さぞかし重かった事でしょう。

だからでしょうか。いつの間にか素直だった白雪姫は、次第に歪んでいきました。父を憎み、義母を憎み、果てはこの国をも憎むようになっていったのです。早く大人になって、こんな所から抜け出したい。そう思うようになっていったのです。

そうやって、少しずつ蓄積されてゆく白雪姫の黒い本心に気付くものは、誰一人としていませんでした。彼女はずっと耐え続けました。父の膨れ上がる期待に必死で応え、どこかよそよそしく、ぎこちない義母と必死で打ち解けようとし、国民にとっては理想の姫であり続けました。

けれど我慢すればするほどに、長い年月は彼女の心を黒く汚していったのです。

◇　◇　◇

「鏡よ鏡。この世で一番美しいのは誰？」

お妃様は鏡に向かってそんな問いかけをしていました。

「一番美しいのは……誰？」

もちろん、鏡が応えてくれる訳はありません。そんな事はお妃様にも分かっていました。けれど、問いかけずにはいられませんでした。そしてお妃様は今日も悲しい一人芝居を続けるのです。

「――それはお妃様、あなたです」

お妃様は、王に見染められて後妻としてこの城に来ました。新しい環境、立場で頑張ろうと思っていました。娘となった姫に名前をつけ、早く近付けるよう努力しました。大好きな夫と仲むつまじく、いつも穏やかでいるよう心がけていました。

けれど、月日の経過は夫の愛をお妃様から奪っていきました。美しかったお妃様に衰えが見え始めたのです。それでもまだ十分に美しかったのですが、その時、既に王の興味は実の娘へと移ってしまっていました。

それはもちろん、親としての愛だったのでしょう。少なくともお妃様はそう信じていました。けれど、美しくひた向きな白雪姫を見る度、鏡に写る自分の老化を見る度に、お妃様は何とも言えぬ悲しみ、寂しさ、恐怖に襲われるのでした。

「それはお妃様……もちろん、あなたです」

愚痴を言う相手もいない孤独なお妃様には、こうして鏡に語りかける事しか出来ませんでした。

「あなた、です……」

馬鹿だと分かっているのにやめられない。毎日お妃様は一人、ひっそりと涙を流すのでした。

その様子を、少し開いた部屋の扉の隙間から、覗き見ている人がいました。けれどもお妃様はそれに気付く事が出来ませんでした。

◇　◇　◇

そんなある日の事でした。事件は始まりました。
その日も、お妃様は部屋で鏡に語りかけていました。

「鏡よ鏡。この世で一番美しいのは誰？」

そしていつもの通り、自分で答えようとした、その時でした。

「それはお妃様、あなたでございます」

突然、鏡がしゃべったのです。お妃様は驚いて、もう一度問いかけてみました。

「鏡よ鏡。この世で一番美しいのは誰？」

「それはお妃様、あなたでございます」

やはり鏡は答えてくれます。戸惑いながらも、疑惑よりも嬉しさの方が勝ってしまい、お妃様はあまり深く考えませんでした。

「けれど……」

喜ぶお妃様の隣で、鏡が再びしゃべり始めました。決して言ってはならない事を。

「けれど、おそらく1ヶ月後には、この世で一番美しいのは、白雪姫となるでしょう」

◇　◇　◇

その日、白雪姫は広い庭に一人きりでいました。自由に外に出してもらえず、友達もいない。彼女もまたこの城で孤独な毎日を送っていました。

高くそびえる塀の向こうには何があるんだろう。これでは檻に閉じ込められた囚人だ……。

白雪姫はレンガを積み上げその上に乗り、爪先立ちで辛うじて外の景色を眺めていました。

「白雪姫様」

背後から声がし、白雪姫は振り返りました。そこにいたのは召し使いの格好の男。けれど白雪姫には見覚えがありません。

「新しく来た人かしら？」

男はそれに答えず、淡々と言います。

「お妃様が、白雪姫を森に遊びに連れて行ってやりなさい、と」

「お母様が！？」

白雪姫は驚きました。そんな事は今までに一度もなかったのですから。そして、何の疑いも持つことなく大喜びで、男について行ってしまったのです。

――その男が、本当に召し使いだと信じて。

2．そして老婆になった訳

白雪姫は男に連れられて、森の奥深くまでやって来ました。そこにはたくさんの、色とりどりの花が咲き乱れています。

「まぁ、なんて綺麗なんでしょう」

白雪姫は目を輝かせ、夢中で花を摘みはじめました。初めての景色に、彼女ははしゃいでいたので、後ろに立つ召し使いの男の手にナイフが握られている事に気付くのに時間がかかってしまいました。笑顔で振り返った白雪姫の目に飛び込んできたのは、自分に切りかかって来る男の姿でした。

「きゃ…っ！」

目を瞑り小さく悲鳴をあげた白雪姫の真白な頬を、鋭いナイフの刃先が滑りました。奇跡的にもかすっただけで助かった白雪姫は、叫びました。

「なっ何をするの！？」

男は淡々と答えます。

「お妃様の命令でございます。貴女を殺すよう命じられました」

白雪姫は驚愕しました。まさか、そんな馬鹿な、と。

男は再び構えます。

「城へ逃げ帰っても無駄ですよ。王は今不在、お妃様の意思は国の意思。貴女にはここで死んでいただきます」

男はじりじりと迫ってきます。握られたナイフの刃先にあるのは、白雪姫の心の臓。

「嫌……っ！」

白雪姫は無我夢中で走り出しました。すぐ後ろからは男が追いかけてくる気配がします。彼女はどんどん森の奥へと追いやられて行きました。

その少し後、王室ではお妃様が落ち着かない様子で、部屋を行ったり来たりしていました。そこへコンコン、と扉を叩く音がして、男が一人入ってきました。それは今さっき白雪姫にナイフを向けた男。お妃様は男に走り寄りました。

「白雪姫は……！？」

男は白々しく、こう答えました。

「ナイフを見ただけで極度に驚き、森の奥へと逃げて行きました。おそらくはもう戻って来ないでしょう」

聞いた途端、お妃様は真っ青になり、その場にへたりこんでしまいました。

「そんな……」

◇◇◇

初めて鏡が言葉を発したあの日から、お妃様は何だって鏡に相談してきました。

『王は、白雪姫の結婚を許さないんじゃないかしら。姫を誰よりも溺愛しているし、いくら白雪姫の婿とは言え、他人を信用しない人だし……』

『白雪姫はもっともっと美しくなるわ。それは本当に嬉しい事よ……けれど自分が醜くなって行くのは耐えられない』

『白雪姫が外の世界に憧れているのは分かっているわ。それでも、城の森の向こうには危険なものにあふれていると言うし……』

『夫は最近何かと理由をつけては出かけて行く……きっと女ね。もう私の事など愛してはいないのよ』

鏡は何も答えません。不安になったお妃様は、いつもの呪文を口にします。

「……鏡よ鏡。この世で一番美しいのは誰？」

すると、ずっとダンマリを決めていた鏡が一言答えてくれます。

「それはお妃様、あなたでございます。けれど、おそらく1ヶ月後には、この世で一番美しいのは、白雪姫となるでしょう」

安心と不安が半分ずつ。そして不安が安心の割合を超えた時、お妃様はついに言ってしまったのです。

「ねぇ…どうしたら私はずっと一番でいられるかしら……？」

しばらくの沈黙の後、鏡はある提案をしました。

「白雪姫を殺してしまえばよいのです」

まさか答えてくれると思ってはいなかったので、お妃様は驚き慌てて否定します。

「だめ！バカ言わないでっあの子は私の大切な娘よ。そんな事出来るはずがないでしょう」

「でしたら」

まるでお妃様がそう言う事が初めから分かっていたかのように、鏡はさらにお妃様を誘惑します。そしてお妃様はまんまと騙されてしまったのです。鏡はこう言いました。

「森の奥へ誘いだし、傷をつけてやればいいのです。そう、小さ

なナイフであの美しい桃色の頬に、ほんの少ーしだけ……」

扉が開く音がして、お妃様の背後には、すでにあの召し使いの格好をした男が、ナイフを持ちそこに立っていました。

◇◇◇

「私のせいだわ……私が白雪姫にバカな対抗心を出したから。私はあの子の母親なのに。そうよ、仮に白雪姫がいなくなったとしても、私が美しくなれる訳ではないのに……」

急激に頭が冷え、お妃様は自分の愚かさに気付きました。いくつもの涙が頬を伝っていきます。けれどいくら後悔してももう遅い。

――今頃暗く冷たい森のどこかで、白雪姫は一人震えているかしら。もしかしたら泣いているかもしれないわ……。

可哀想な白雪姫の事を思い、お妃様は自分を呪いました。白雪姫が戻ってきてくれるのならば何だってする、美しさすらいらない……本気でそう思えました。

「そうよ……美しさなんてもういらないわ。そのせいで白雪姫に酷い事をしてしまったんだもの。私が自ら白雪姫を探しにゆくわ。……あぁでも白雪姫はもう私の事を許してはくれないかもしれない……」

ぶつぶつと悩むお妃様に、しばらく黙っていた鏡が再び口を開きました。

「ならば…」

しかしお妃様は発言を許しません。

「お黙りなさい。鏡などの言う事を真に受けた私がバカだったのよ。もう失敗したりしないわ」

強気なお妃様に、鏡は怯む事無く喋り続けます。

「ならば地下に行き、そこに眠る薬を取ってくれれば良いのです。いにしえから伝わるそれは幻の変老の薬……」

「お黙りなさいったら！もう鏡に助けは求めません！」

それきり鏡は嘘のように黙り込みました。しかし、お妃様の脳裏にはしっかりと刻み込まれてしまっていました。

――いにしえから伝わるそれは幻の変老の薬――

3．七人の小人

白雪姫はフラフラになりながら、途方に暮れていました。森は暗く不気味で前方すら満足に見えません。どこまでも続く深い森は、白雪姫に恐怖を与えました。

もう歩けない、と白雪姫が膝をついたその時です。どこからともなく蹄の音が響いてきました。疲れきった白雪姫がゆっくりと顔をあげると、白く大きな何かが目の前にありました。

「おや？お嬢さん。こんな夜中にこんな所で…どうしたのですか」

白雪姫は目を見開き驚きました。よく見ると目の前にいるそれは、輝くほど白く美しい馬でした。白雪姫に声をかけ、馬から降りた男の人は、こちらに歩いて来ます。

「あの…その、森に入って、迷ってしまって……」

白雪姫はしどろもどろに答えました。嘘はついていません。オロオロとする白雪姫に、その男の人はそれ以上深く聞く事もせず、ただ笑って手を差し伸べました。

「では私の知り合いの家にご案内いたしましょう。とりあえず今夜はそこにお泊まりなさい。せっかく美しい方なのに、そんな泥まみれではいけない」

本当に疲れていて、傷だらけで、帰る所もない白雪姫には、それはとてもありがたい申し出でした。行くあてもなく、一人で心細く泣き出しそうだった彼女にとって、暗闇に突然現れたその人は、ま

るで――そう、王子様のようだったのです。

◇◇◇

朝、目を覚ますと白雪姫は見知らぬ家のベッドで寝ていました。
昨日森で出会った男の人に馬に乗せてもらい、そしていろんな事を話したところまでは覚えています。どうやらその間に眠ってしまったようです。
そうすると、ここはあの方のお知り合いの家かしら。そう考えながら白雪姫は体を起こしました。
ぼぅっとしていると、知らず涙が出てきました。

お母様は私を殺そうとした。どうして。最近は、ようやく少しずついい関係になってきたと思えていたのに。お母様も前より明るくなっていたのに。

昨日は逃げる事に必死でゆっくり考えている余裕は無かったけれど、今は疲れもとれ頭もしっかりしています。だから涙が次から次へと止まりません。

もうお城には帰れない。みんなにも会えない。私はこれからどうすればいいの？

――あなたはどこか放って置けない――

私をここに連れてきてくれた命の恩人。あの方は私の王子様。

白雪姫は、眠ってしまうまでの間に自分の身上を、彼にほとんど全てを話してしまっていました。

――私はあなたの力になりたい――

短い時間のなかで、二人は互いに恋に落ちてしまったようでした。

私はあの方と一緒にいたい。こんな気持ちは初めて…ずっと、側にいたい。

深く孤独な悲しみの中で、森で出会った男は、白雪姫にとって唯一の希望であり、光でした。

◇◇◇

白雪姫が階段を見つけ、下に降りようとしていた時でした。玄関の戸が開く音がして、誰かが入ってきました。この家の住人のようです。白雪姫は服と髪を正すと、階段を降りてゆきました。

「泊めていただいたお礼を言わなくては」

けれど白雪姫は勘違いしていました。こんな小さな家に、住人が7人もいたなんて思っていなかったのです。

白雪姫が見たのは、揃いの帽子を被り揃いの薄汚い布切れを纏った、疲れきった表情の7人の男達でした。

◇◇◇

あれから1週間ほどが経ちました。朝日に照らされた白雪姫は、笑顔でキッチンにいました。

あの日から、白雪姫はこの家で暮らしていました。一人きりになった白雪姫を、ここの住人たちは快く迎えてくれました。彼らにとっても、家事全般をこなしてくれる白雪姫はありがたい存在となっていました。

彼ら7人はこの森の研究をしたり、山へ鉱物を探しに行ったりしているそうです。小人というのは名ばかりで、実際には白雪姫よりも背丈のある若者たちでした。

なぜ小人と呼ばれているのか、という問いに彼らは、

「あいつから見たら、オレ達はただのちっぽけな働き手だからなんじゃないか」

と自嘲気味に笑うだけでした。白雪姫はよく分かりませんでしたが、あまり深く入り込むのはやめておきました。

古い布切れのような帽子と服や、自分達で作ったというこの家や、毎日朝から晩まで働きに行っているという事が、彼らが何かしらの苦労を背負っているのだと感じさせたからです。

森で助けてくれた男の人の事も聞いてみました。彼のおかげでここにいられるのですから、改めてお礼が言いたかったのです。

「奴はここから離れた所に住んでる。こっちに降りて来る事なんて滅多にない」

名前も聞いていないけれど、きっともう一度会いに来てくれるはず…白雪姫はそう信じていました。

「友達？いや、違うな。あまり会う事もないから…よく知らない」

彼の話をする時の小人達の表情が、どこか曇っていた事に、白雪姫は気付いてもいませんでした。

7人の小人達は皆、陽気で明るく、親切に接してくれました。けれど一人にだけ、白雪姫は邪険にされているような感じを受けていました。話しかけても反応がなく、顔を見ると睨まれている気がするのです。他の6人は気にするなと言ってくれますが、白雪姫はどうにかして打ち解けたいと思っていました。

彼の名前はグランピー。無口で無愛想な接しにくい青年でした。

4．お望みのままに

小人達がいつものように仕事に行った後、白雪姫は一人で家の掃除をしていました。すると扉を叩く音がしました。

窓からそっと外を窺います。そこからあの白く大きな馬がみえました。白雪姫の胸の鼓動は激しく波打ちました。急いで扉を開けると、そこに立っていた人物は柔らかく微笑みました。

「お久しぶりです。お元気そうでよかった」

白雪姫は自分を助けてくれた男を、嬉しそうに迎え入れました。

男は自分は山の上にある城の王子だと言いました。たまに下へ降りて森を散策するらしく、あの日偶然白雪姫を見つけたそうです。

「あなたのおかげで私は今生きる事ができています。本当にありがとうございます」

白雪姫は心からお礼の言葉を伸べました。

◇◇◇

その夜のお妃様はというと、部屋でじっと鏡を見つめていました。その側にあるテーブルの上には、紫色の液体の入った怪しげな小瓶が置いてあります。

「白雪姫。明日…あなたに会いにゆくからね」

呟いた時、外の廊下から騒がしい足音が近づいてきて、お妃様の部屋の扉が激しく叩かれました。お妃様が開けてみると、青い顔をした召し使いの一人が息を切らせ立っていました。

「何事です、こんな夜中に」

召し使いは声を震わせながら、言いました。

「大変でございます……王が、王が！」

慌てる召し使いを見つめながらお妃様はぼんやりと考えていました。

そういえばここ数日王の姿を見ていない。最後に会ったのはいつだったかしら。てっきり他の女と仲良くやっていると思っていたけれど……

「――王に何があったの？」

青ざめた召し使いは首を振るばかりでした。

「王は…森一つ向こうの国におでかけになられていたようで……」

召し使いは震えながら口を開きました。

「まぁ、あそこは今民衆の暴動でひどく荒れているそうじゃない」

森一つ向こうの国の王政は酷いらしく、王は関わり合いを持つな

と言っていました。金銭的にも困っているらしく、長くもたないだろうと噂されていました。

「ここにも何度か来たわ。お金を貸してくれって。王はいつも突き返していたけれど」

召し使い達も皆四方へ逃げ出し、今ここにいる召し使いも元々は森一つ向こうの国の者でした。

「もうあの国には頼りになる人はいないんじゃない？…あら、でも確か……」

そう。確かまだ召し使いは残っていたはずです。お妃様は、国をいくらか下った森の外れで暮らしている者たちの話を聞いた事がありました。彼らは、

「七人…だったかしら」

今でもまだ、王家のために働いているそうです。

◇◇◇

「お母様が私を殺しに老婆に化けてやって来る…！？」

信じられない事を言い出した白雪姫。けれど目の前にいる王子は深刻そうに頷きました。

「いつかは詳しく分からないけど、彼女を信じてはいけない。訪ねて来ても決して中に入れてはなりません」

「でも……」

白雪姫はいまいち信じる事が出来ません。きっとまだ義母を完全に恨めないのです。

――母はそのうち私を探しに来てくれる。ごめんねって、私が悪かったわって、冗談なのよって。そう言って笑ってくれる。

白雪姫は小人の家にいながら、そんな事を毎晩願っていたのです。

黙ってうつ向いてしまった白雪姫に、王子はゆっくりと言いました。

「…そういえば、噂で聞いたんだけど……どこかの国の王様が亡くなったらしくて大騒ぎですよ」

「そう、ですか…」

上の空の白雪姫に、更に王子は畳み掛けます。

「精神的に辛いときに、気分転換に行った他国で事故にあったんですよ」

なぜ詳しく知っているのか、なぜ詳しく話すのか。白雪姫はぼうっと聞いていました。

「後妻さんとうまくいってなかったようで、愛する娘も行方不明で…」

「え？」

ハッと顔をあげた白雪姫に、王子はよく思い出せないという表情で言いました。

「何だったかな…白雪姫、とか何とか……あれ、どうかしましたか？」

青ざめた白雪姫は何と言えばいいか分からず、呆然と口を開きました。しかしそれは的を得ていて、逆になぜすぐに疑問に思わなかったのかが不思議なくらいでした。

「なんで母が老婆に化けて来るなんて分かるのですか……？」

王子は優しく微笑み答えました。

「友達が教えてくれたんです」

「さて、それでは私はそろそろ失礼します。お母様にはくれぐれもお気をつけて」

「あの、友達って…」

立ち上がった王子にもう少し詳しい話を聞きたかったのですが、彼は白雪姫の言葉を遮りました。

「そうそう。今日私がここに来た事は、小人達には言わないでおいて下さい」

「……どうして、ですか」

不安げな白雪姫に、王子は困ったように笑いました。

「実を言うと…あまり仲が良くないもので」

その日、王子が家を出た３０分後に小人達が帰ってきました。

「ただいま、白雪姫。今日も何事もなかったかい？」

そう聞かれ、白雪姫は笑顔で答えました。

「えぇ。何もなかったわ」

微笑む小人達の一番後ろで、一人真顔のグランピーが白雪姫をじっと見つめていました。

◇◇◇

来ないで。お願いだから…来ないで……――。

次の日、白雪姫は暗い家で一人、繰り返しそう願っていました。

だってこの場所が分かるはずないもの。お母様がここに来るはずないわ。私を殺しになんて来ないわ……。

こんこん

静寂を破る突然のノックの音に、白雪姫はびくっと体を震わせました。息を殺して扉を見つめます。

こんこん

「どなた様か、いらっしゃいませんか」

扉の向こうから小さく聞こえてきた、か細いしゃがれた声を聞いた白雪姫は、頭が真っ白になりました。

いや、まだ分からない。ただ道に迷った知らぬお婆さんかもしれない。

そっと聞き耳を立てていると、扉の向こうの老婆はさらに言いました。

「おいしい林檎を売りに来たんだよ。どなた様かいらっしゃいませんか」

陽は落ちてきて辺りは薄暗くなっていたけれど、家の灯りはまだつけていませんでした。だから、留守を装う事も出来たのです。

『私はあなたと一緒にいたいだけなのです』

昨日の王子との会話が蘇ります。

『今は信じられなくてもかまいません。けれど、もしあなたのお

母様が本当にあなたを殺しにやってきても、あなたは死んではいけません。私と私の国に来て下さい。そして二人で幸せになりましょう』

白雪姫はぼんやりと考えました。私は何と答えたかしら、と。

『お母様は来ません……絶対』

だとしたら今扉の向こうで私を呼ぶあの声は誰のものなの。老婆に化けて林檎を売りにやって来たのは誰だと言うの。私が林檎が好きだと、見知らぬ老婆がどうして知っているというの…。

白雪姫の目から涙がこぼれ落ちました。そして、フラフラとした足取りで扉に向かい、ゆっくりとドアノブを回しました。

その様子を木の陰からそっと覗いているものがいました。彼は母子のしばらくぶりの再会を見届けると、薄ら笑いを浮かべながら、森の中へと消えてゆきました。

「あぁ可哀想な白雪姫。全ては王子のお望みのままに……――」

5．幸せを、願っただけ

お妃様は曲がった腰を庇いながら、たった今開いた戸口に立つ娘を見つめました。

久しぶりに会った白雪姫は、またさらに美しくなったように思えました。静かに微笑む彼女は、女神のようで。対照的に醜い老婆と成り果てたお妃様は、自由のきかない体を杖で支えて立っていて。けれどももう美しさへの執着心も、白雪姫への嫉妬や対抗心もありませんでした。素直に娘の成長を喜ぶ事が出来ました。

白雪姫を失う怖さに気づき、彼女を愛していた事を知ったのです。

白雪姫はとても落ち着いた気持ちで、戸口に立つ老婆を見つめました。

久しぶりに会った義母は、白雪姫が知っている彼女の面影は無く、まるで別人でした。ならばなぜ、お妃様だと思い込んでしまったのか。なぜ一言、お母様ですかと聞かなかったのか。そうすればそこで終わったかもしれなかったのに。

全ては王子の言葉を信じていたからに他なりません。今の白雪姫にとっては、たった一つの拠り所だったのですから。

『よし、ではこうしましょう。もし仮にあなたのお母様がここへ来たとします。あなたが無視しても追い返しても、何度でもやって来るかもしれない』

「林檎を売りにいらしたんですって？」

白雪姫は優しくそう言いました。

『ならばいっそ家に迎えいれなさい。そうして彼女が持ってきた林檎を受け取りなさい』

「私、林檎大好きなの。美味しい林檎なら是非頂きたいわ」

老婆は喜んでカゴから林檎を差し出しました。

『但し気をつけて。林檎には毒が入れられているそうですから。――えぇ、これも先ほどと同様、友達が教えてくれたんです』

「まぁ、赤々として美味しそう。おひとつ下さいな」

『だから林檎をかじるふりだけするのです。倒れたように見せかければ、お母様は満足して帰って行くでしょう』

――私の王子様。あなたの言う通りにします。そして二人で幸せになりましょう。

嬉しそうに林檎を受け取った白雪姫を見て、お妃様は言いました。

「これはね。願いが叶う林檎なんだよ。一番叶えたい事を想いながら食べると、それが本当になるんだよ」

白雪姫はきっと父や国を恋しがっているだろうと、お妃様は思いました。ですから、彼女の願いは勿論、家に帰りたい、だと思ったのです。

白雪姫が願い林檎を口にした時、お妃様はローブの中にある解毒剤――つまりは元の姿に戻る薬を飲み、正体を明かし彼女に謝り、

一緒に城へ帰る。それがお妃様の考えでした。
――いいえ、それが鏡がお妃様に提案した、完璧なる計画でした。

「私の願い……」

林檎を大切そうに両手で包み込み、白雪姫は目を閉じました。その耳には、徐々に近づいてきている小人達の足音と歌声が聞こえていました。
そして小さく呟くのです。

「私の、幸せを邪魔する者を…、消して下さい」

白雪姫は林檎を一口かじりました。
その声は小さくかすれていたので、老婆の遠くなった耳には届かず、ただ白雪姫が倒れた時の低く鈍い音だけが、部屋中に響きました。

「し、白雪姫……？」

突然の事にお妃様はびっくりして白雪姫に近づきました。彼女に触れようとしたちょうどその時、開け放したままだった入り口の向こうから、小人達が帰ってきました。

「誰だ！」

小人の一人が叫びます。

「白雪姫！？」

別な一人が倒れている白雪姫を見つけ、全員で駆け寄りました。

「お前…何をした！」

更に一人に大声をあげ睨みつけられたので、怖くなったお妃様は訳も分からないまま家を飛び出しました。

どうして白雪姫が倒れたのか分からず、お妃様は混乱していました。必死に走りますが、後ろからは小人達が追ってくる音がします。老いた体は言うことを聞かず、解毒剤を飲む暇すら与えられません。

◇◇◇

お妃様と小人達がいなくなった後、白雪姫は起き上がると、口に含んでいた林檎の欠片を吐き出しました。そして念のために口をゆすぎに行こうと方向を変えましたが、驚いて足を止めました。

けれどいきなり立ち上がった白雪姫に、そこにいた人物の方が驚き目を丸くしていました。そしていぶかしげに白雪姫を見つめると、いつもの無愛想で低い声で言いました。

「どういう事だ？」

白雪姫は動じる事なく、自分を睨むグランピーを初めて睨み返しました。

白雪姫は入り口へと向かいました。

「あなたには関係無いでしょう。放って置いて下さい」

白雪姫は冷たく言いました。

「でもあいつら心配してる」

グランピーの言葉にも耳を貸さず、見向きすらせず、家を飛び出しました。

◇◇◇

どこをどう走ったのか、いつの間にやら追手の気配は無くなっており、お妃様は小高くなった崖の行き止まりまで来ていました。息も絶えだえ、足はガクガクと震え体は限界に達していました。

「お婆様」

突然の背後からの声に、お妃様はびくりと体を震わせました。小人達に追いつかれたと思ったのです。

けれど振り向いた先にいたのが白雪姫であると分かった時、どれほど安心した事でしょう。

「あぁ…白雪姫。いきなり倒れたからどうしたのかと心配したわ」

白雪姫はただ微笑むばかりでした。

「あのね…私あなたに酷い事をしたわ。だから謝りにきたの」

お妃様は薄汚れたローブ中を探ります。

「私はあなたの本当の母親になれるかしら」

そして小瓶を取り出し蓋を開けました。

「一緒に家へ帰りましょう」

確かにお妃様は罪を犯しましたが、その過ちはそれほどまでに、責められなければならないものではないでしょう。

けれど白雪姫は深く傷つきました。悲しみは彼女を惑わせ、善悪の判断を鈍らせ、そして憎しみへと変えてしまいました。

薬を飲んだ老婆は、元の美しいお妃様に戻りました。真っ赤な林檎を白雪姫に差し出し、微笑みます。

「あなたを愛しているわ」

白雪姫はお妃様のもとへと近づいてゆきます。その瞳はじっと林檎を見つめていました。

崖の下にあるはずの深い森は、陽の落ちた今となっては、ただ暗い闇が無限に広がっているばかりでした。それは、落ちてしまえば永久にこの世界から消えてしまいそうな、そんな不気味な黒さでした。時折、お妃様の足元からいくつかの小石が崖下へと転がっていきますが、それらが地にたどり着く音は一度も聞こえては来ません

でした。
林檎を受け取った白雪姫は、その林檎に向かって呟きます。
「願いを叶えて下さるのよね」
家に帰っても、もうお父様はいない。そしてそれは私がいなくなったせい。そして…それはお母様のせい。
「幸せになるためですものね」
その為に私の幸せを邪魔する元凶は消してしまわねば…。大丈夫。私は間違っていないわ。王子様も言っていた。
「あのね、お母様」
元凶は誰？
「さようなら」
とん、と軽く。白雪姫は前に手を押し出しました。その先にいるお妃様をめがけて。

◇◇◇

何が起こっているのか、分かりませんでした。
体が宙に浮いた気がして、白雪姫が上へと離れてゆく気がして、

籠から林檎がこぼれ落ちた気がして。
そしてお妃様は、悲しみの表情の白雪姫の背後に、岩陰に隠れて男が一人立っているのを見ました。あれは確かに。その場に崩れ落ちた白雪姫に駆け寄って行ったあの男は確かに、

――まぁ、あそこは今民衆の暴動でひどく荒れているそうじゃないここにも何度か来たわ　お金を貸してくれって――

森一つ向こうの国の王の一人息子でした。

お妃様は小さくなっていく二人を見つめながら、祈りました。

大切な白雪姫。あなたが選んだ先が、光り輝く道でありますよう。あなたが選んだ人が、優しく誠実でありますよう。私はいつでもあなたを見守っています。自分のしたことに後悔してはだめよ、白雪姫。どうか自分を責めないで。
あなたはただ、

幸せを、願っただけなのだから――。

6．紅茶のおかわりを

「――話をするうちに、はっきりと思い出しました。繁った木々がクッションになった為か、私はまだ生きていて、森の中をさ迷い歩いていたのです」

そうしてここにたどり着いたのだ、とエレナは話した。そして一息つくと、すっかり冷めきってしまった紅茶に手をのばした。

「エレナさんはお妃様でしたか。どおりで美しいと思った」

エレナの話を黙ってただ聞いていたテルが、久しぶりにその口を開く。

「辛い目に……あったのですね」

うつ向いたエレナの肩が震える。

「いえ、私が悪いんです。辛い目にあったというならそれは白雪姫の方でしょう。これからあの男と幸せになってくれればいいのだけれど」

はぁ、とため息をつくエレナを、テルは気の毒そうに見つめる。そして言いづらそうに呟いた。

「エレナさん。あなたは真実を知らねばなりません」

「…真実？何ですか」

エレナは顔をあげた。そこにある、彼女をまっすぐに見つめるテルの瞳の、どこまでも深い青にエレナは吸い込まれそうになった。
テルは立ち上がり、空になった自分のカップと、冷えきった紅茶の入ったエレナのカップをおぼんに乗せた。

「紅茶のおかわりを入れて来ます。話はそれからにしましょう」

そして彼は部屋を出た。
すぐ隣にキッチンがあるのだろうか、開け放されたドアの向こうに、ぱたぱたと左右に動くテルの姿が見える。
不思議な人だわ。エレナはそう思った。近くにこんな場所がある なんて知らなかった。あの人はここで一人で暮らしているのかしら。
青い瞳と髪がよく似合う、彼の事を知りたくなった。

しばらくして、湯気の立つ二つのカップをおぼんに乗せて、テルが部屋に戻ってきた。エレナは紅茶のおかわりを受け取ると、温かいカップに手を当てながら、椅子に座るテルに話しかけた。

「知らなかったわ。森にこんな素敵なお店があったなんて」

テルは微笑み答える。

「ありがとうございます」

エレナは更に聞いた。しかし今度ははっきりしない。

「あなたの家はここなの？」

「はい、まぁ……えぇ」

困ったように笑うテルを見て、彼にも何か事情があるのだと思ったエレナは、あまり深く深く聞くのはやめておこうと思った。けれどやはり、自分の長い話を最後までずっと真剣に聞いてくれたので、彼にも話して欲しい気持ちもあった。話してすっきりするなら、いくらでも聞こうと思った。

「何か、私のお役に立てる事はない？」

そのエレナの申し出は、テルにとってとても嬉しい事だった。話してしまえばどれほど楽になるだろう。けれど実際には誰に頼っても、どうしようもない事だと彼には分かっていた。それにここは、この店は、自分は、お客様のために存在しているのだ。だからテルは黙って立ち上がり再びキッチンへと向かったのだ。

そして出来上がった夕食をエレナと食べ、腹が膨れたところでようやく口を開いた。だが、その内容は自分の話ではなく、先ほどエレナに言った、『真実』の物語であった。

「エレナさん。あなたは真実を知らねばなりません」

白雪姫が今、本当に幸せなのかどうかという事を。

「あなたは森一つ向こうの国の王は酷いけれど、その王子はきっと白雪姫を幸せにしてくれる。…そう信じたいのですよね」

エレナは小さく頷いた。

「だからその為に邪魔だと思われたあなたは、もうお城へ帰らない気だ」

「…白雪姫がそれを望んでいるのなら」

エレナは悲しそうにそう呟いた。彼女は先ほどから思っていた。偶然かもしれないけど、この場所にたどり着いた。ここならこっそり白雪姫の様子を見に行ける。ここに…置いてもらえないかしら。しかしテルの一言でその考えは消し飛んだ。

「ではお教えいたしましょう。今あなたが帰らなければ、白雪姫は一生悲しみ悶え苦しむ事になるでしょう。自らの過ちを後悔しながら」

「…どういう事ですか」

エレナは顔を青くした。

「言い忘れていましたが」

そんな彼女に、何故知っているのか、テルは言った。

「あなたが崖から落ちてから既に1ヶ月以上経っています」

「え……？」

エレナは言葉を繋ぐ事が出来なかった。それもそのはず、彼女自身崖から落ちてから物を食べたり飲んだりしたことは一度も無かったし、何より感覚的にそんなに時間が経っている訳はなかった。睡眠を取った記憶もない、せいぜい長くても1日くらいしか、森の中を歩いてはいないのだ。

「そんな…まさかそんな事、ないわ。知らないのに適当な事言わ

ないで頂戴」

困惑するエレナにテルは、少し長くなりますが、とつけて話をし始めた。

「そうですね…話すならずっと始めまで遡ります。そう、あなたが鏡に話しかけていた頃まで……――」

7．明かされる真実

「やつが…やつが金さえ貸してくれていれば…！」

頭を抱え、そんな八つ当たりを口にする父の様子を、王子は今日も遠目に窺っていました。今の父は威厳の欠片もなく、哀れな姿は見るに耐えがたいものでした。

国は借金にまみれ荒れ放題、民は暴動を起こし最早手がつけられず、それを止めるはずの家来達も、ほとんどが国を見捨てて逃げ出してしまいました。こんな状況になっているにも関わらず、愚かな王は自らの過ちを認めようとはせず、民の意見に耳を貸そうとも頭を下げようともしません。ただただ、『金を貸してくれない近隣の国のせい』にし、いまだに力で支配しようとするだけでした。

◇◇◇

「――王子。本日のご報告を致します」

一方で、一人息子である王子は幼い頃から賢い子供でした。要領がよく常に大きな野望に満ち溢れていました。

「王妃が行動を起こしました」

国が危機に陥っている今も、王子は国を立て直す事を考えていま

した。しかしそれは、父王のためなどでは決してなく、愛国心からでもなく、王子としての責任感からでもありません。

「隙は充分に出来ております」

目をつけたターゲットは、王が幾度となく足を運んだ森一つ向こうの国でした。平和で潤ったその国を治める、聡明な王と美しい王妃、そして麗しい王女。

「丁度良い機会となるかも知れませぬ。…ご指示を」

膝をつき頭を下げる忠実な家来の言葉に、王子はにやりと笑いました。

◇◇◇

それから数日後のある日。

毎日のように、深夜になるとひっそり自国に戻り、王子に状況報告をしていた男は、ある国のお妃様がいつものように鏡に話しかけるのを、鏡の後ろで息を殺してじっと待っていました。彼はその国で召し使いとして、と同時にスパイとして働いていました。

準備は出来ています。お妃様が話しかけた時、その整った美声でたった一言妖艶に呟けばいいのです。

「――それはお妃様、あなたでございます」

お妃様を洗脳してゆくのです。その美声でお妃様を虜にし、絶対的な存在となるのです。そして有力な情報を得るのが、鏡としての男の最初の役目でした。

『王は、白雪姫の結婚を許さないんじゃないかしら。姫を誰よりも溺愛しているし、いくら白雪姫の婿とは言え、他人を信用しない人だし……』

なるほど。

王が邪魔になってくるな。始末するしかない。

『白雪姫はもっともっと美しくなるわ。それは本当に嬉しい事よ……けれど自分が醜くなって行くのは耐えられない』

なるほど。

王妃は美意識が非常に高い。その上白雪姫に激しい対抗心を持っている。

『白雪姫が外の世界に憧れているのは分かっているわ。それでも、城の森の向こうには危険なものにあふれていると言うし……』

なるほど。

確かに彼女はいつも外を眺めている。連れ出せばさぞ喜んでついて来るだろう。

『夫は最近何かと理由をつけては出かけて行く……きっと女ね。もう私の事など愛してはいないのよ』

なるほど。
王妃は知らぬのか。王に愛人でもいると思っているのか。
そうやって情報を集め、計画は着々と進行していきます。そして頃合いを見て、お妃様を唆すのです。
扉の所に立つ召し使いの男に、一旦役目は移ります。彼は命令通り王女を森の奥へと追いやる事でしょう。

◇◇◇

『絶対絶対、少しだけにしてよ。姫を怖がらせては、駄目よ。ああでもやっぱり……』

最後の最後まで鏡の計画を拒否していたお妃様は、ついに丸め込まれてしまった後、男にそう懇願しました。
けれどその願いも虚しく、男はさらりと嘘をつきました。そしてその言葉は白雪姫を愕然とさせ、義母への不信感を強烈なまでに抱かせたのです。

「お妃様の命令でございます。貴女を殺すよう命じられました」

その時の白雪姫の絶望的な表情が、男の言葉をすっかり鵜呑みにしてしまった事を伝えました。
男はナイフを構え直し、更に彼女を追いつめてゆきます。

「城へ逃げ帰っても無駄ですよ。王は今不在、お妃様の意思は国の意思。貴女にはここで死んでいただきます」

白雪姫に残された逃道は、一つしかありませんでした。
その様子を木の陰から見ていた男は、白雪姫が森の奥へと消えていったのを見届けた後で、その姿を現しました。

「ご苦労。次は私の番だ」

にやりと笑う男は、誰が見てもそうとしか思えない、＞そのもの＜の格好をしていました。つまりは全身白尽くめでマントを翻し、頭には王冠を乗せ、袂の手綱に真白な馬を連れていたのです。
ナイフを持つ男はひざまずき、静かに頭を下げます。

「例の薬はもう置いて来たのか」

「はい、地下の一番深い所に置いてございます」

その言葉を聞き、王子は満足そうに頷きました。

「よし、では行って来るよ」

「――お気をつけて」

王子はひらりと馬に乗り込み、軽やかに駆けてゆきます。
そしてうずくまる白雪姫の前に飛び出し、何食わぬ顔で声をかけました。

「おや？お嬢さん。こんな夜中にこんな所で…どうしたのですか」

頼る人も帰る所も無く、白雪姫はどれほど混乱していた事でしょう。今はまだ状況を飲み込めなくても、やがて訪れる絶望を、無意

識に恐れていたかも知れません。無意識に目を背けていたかも知れません。

王子は彼女のその弱りきったスカスカの心に、見事入り込んだのです。

暗く不気味な森で一人、ボロボロな体が崩れ落ちた時、突然現れた男。場違いなまでに白く美しく輝く彼を、白雪姫は幻とさえ思った事でしょう。

そうして王子は眠ってしまった白雪姫を、七人の小人達のもとへと連れてゆきました。

◇◇◇

「王子…！どうされたのですか」

小人達は驚きました。国の外れにひっそりと佇むこの小さな家を、王子が訪問するなど滅多にないからです。実際彼らが王子の姿を見たのは数年ぶりの事でした。

「ちょっと預かって欲しいものがあるんだ」

王子はそう言って白馬の上で眠る白雪姫を振り返りました。

「預かるってその少女ですか！？」

狭い世界でたったの七人で暮らす小人達は、救いようのない王政

も自国の危機も、近隣の国の美しい王女の事も、何も知りません。毎日自分達の生活のために働き、毎日来る使者に見つけた鉱物や新しい発見などを譲渡します。すると次の日生活に必要な物資が届くのです。小人達は自分達が生活出来ればそれ以上何も求めないので、王達にとっては実に良い忠実な働き手でした。

「この娘には私の事は話さなくて良い。ただしばらく面倒を見ていてくれ」

王子はそう言い残すと、白雪姫を置いて再び来た道を戻って行きました。

呆気にとられながら王子を見送る小人達の中で一人だけ、眠る白雪姫を見つめるものがいました。彼こそがグランピー。母を亡くした今の白雪姫を支える、彼女の大切な人でした。

◇◇◇

しばらくの後、王子は小人達のいない時間を狙い、白雪姫に会いに行きました。

今日の彼のすべき事は3つ。

わざわざ白雪姫に会いたくて来たと思わせる事。老婆の話で王妃への不信感を更に募らせる事。そして最後に、王の死という“嘘”を伝える事。

王は死んでなどいないのです。『愛娘の居場所』――この一言で自国におびきだし、暴漢に襲わせた事は事実ですが、重症を負わせ

たにとどまっています。
今はまだ殺す必要なんてないのです。『お母様が私を追いやったせい』で、お父様は亡くなった。そう白雪姫に思わせられればよかったのです。

全てが終わった後で、奴が嫌う我が国に自国を乗っ取られてゆく様を見せた後で、愛娘が利用された事を知った後で。
どん底に突き落としてから、始末すればよい。

そんな計算に胸を躍らせながら、王子は小さな家の扉を叩きました。

8．誘い、導く

「様子はどうだ、彼女はうまくやってくれたかい？」

小さな家の中での出来事の一部始終を盗み見ていた男に、背後から王子が声をかけました。

「ちょうど今、王妃が家から飛び出しました。後を小人達が追っています」

「うん、いいタイミングだ」

王子はそう言うと、白雪姫しかいないはずの家に向かいました。お妃様を追うよう、促すためです。

けれど、開け放された扉から白雪姫が立ち上がるのを見て、そしてその視線の先を見て、王子は足を止めました。

――小人が1人残っていた。これでは白雪姫に近付けない。計画が狂ってしまう……王子は慌てて家の壁に沿って隠れ、耳をそばだてました。

『どういう事だ？』

『あなたには関係無いでしょう。放って置いて下さい』

『でもあいつら心配してる』

短い会話でした。その直後、白雪姫は家から走り出てきました。

「待って…！」

王子はすぐに白雪姫に小さく声をかけました。白雪姫は険しい顔を和らげ、笑顔で駆け寄ってきました。

「いらしてたのね、よかったわ。あなたに会わなければと思っていたの」

王子はひっそりと白雪姫に囁きます。

「お母様を追いなさい」

白雪姫はきょとんとしました。もう事はすんだのに、と言いたげです。王子は極めて重大であるかのように、小さな声に力を込めて言いました。

「小人達が危険です…！」

日数にすれば、とても短い間でした。けれど彼女は救われたのです。その暖かさに、その優しさに、その明るさに。生きてゆく希望は、七人の小人達との穏やかな暮らしの中で見つけたものでした。

「さっき老婆とすれ違いました。ローブが血で真っ赤に濡れていました…あれは恐らく小び――」

「どちらへ行きました」

落ち着いてよく考えれば分かったはずです。小人達は男六人に対し、お妃様は丸腰で一人だという事。皆たった今出ていったばかり

だという事。そして、お妃様のローブは真っ黒だったという事を。

「母はどちらへ走って行きました？」

そう問う白雪姫は落ち着いて見えました。声を張り上げるでも焦るでもなく、冷静に王子にそう訊ねました。

「あっちです」

王子は岩場を指差しました。

「あの崖の方です」

◇◇◇

一人取り残されたグランピーは考えていました。

何なんだ、一体。何故倒れたふりなんか、と。

そしてそれ以上に。

何故俺は素直に言えないのだろうか。

――一番心配しているのは俺だと。だから一人、倒れた君の側に残ったのだと。

きっと彼女は思っているだろう。無愛想で近よりがたい奴に睨まれている、と。違うんだ、俺は。

ただうまく伝える事が出来なくて、見つめる事しか出来なくて……――。

はぁ、とため息をつき、グランピーは外へ出ました。顔をあげると、そこには走り去って行く白雪姫のか細い背中を見つめる王子がいました。

「そこで何してる」

グランピーは王子の背後から声をかけ、王子はゆっくりとグランピーの方を振り返り、二人は互いを視界に入れました。

「やぁ。今日はなんだか騒々しいね」

王子は微笑み、他人事のように答えました。

「でも大丈夫だよ」

グランピーは王子を睨んだまま、黙っています。王子は再び白雪姫の走って行った方を向き、目を細めました。

「もうすぐ静かで穏やかな平和が来るから」

王子は嬉しそうにそう言うと、愛馬のもとへと歩いて行きました。

◇◇◇

「どのように致しますか」

森の陰で待っていた召し使いの男が王子に尋ねます。どう始末するのかと聞いたのです。王子はひらりと馬に乗り込みました。

「いやいいよ。放っとけ」

「しかし」

召し使いの言葉を無視し、馬は進んで行きます。

「今更、世間知らずな小人に何が出来る」

王子は鼻で笑いました。

その小人に完璧だった計画が水の泡にされるなど夢にも思わず。

「それより小人達の方は大丈夫なんだろうな」

「はい。彼らが王妃に追いつく事はありません。そして白雪姫よりも先に帰って来る事もありません」

それを聞いた王子は、意気揚々と白雪姫を追って行きました。

お妃様を追いかけた小人達は、王子の召し使いに別の場所へと誘導され、その隙に白雪姫は崖でお妃様と対峙します

白雪姫の瞳の中で、落ちゆく母は泣いているようにも微笑んでい

るようにも見えました

籠からこぼれ出た赤い林檎に、届かない手を伸ばし何かを祈っているようにも見えました

その場に崩れ落ちた時、王子が息を切らせ駆けつけ、白雪姫を立たせました

そして下に用意してあった馬に白雪姫を乗せ家へと急ぎました

小人達はお妃様を探しまわりますが、結局見つけることが出来ず、ようやく家に帰って来るのです

――そしてそこで再び目にするのは、

老婆に毒りんごを食べさせられ、ずっと変わらず倒れたままの、白雪姫でした。

9．私の王子様

小人達は白雪姫をガラスの棺に入れました。土葬も火葬もしたくありませんでした。動かなくなった白雪姫は死んでいるようには見えず、変わらず美しかったので、そのうち目を開けるのではないかと思わずにはいられなかったのです。

そのガラスの棺を囲む６人の小人達は、皆泣いていました。

――彼らが気付いたのはいつ頃だったでしょう。いつの間にかグランピーは姿を消していました。小人達は老婆を探している最中にはぐれたと思っていました。毎日入る森の事は詳しいはずなので心配してはいませんでしたが、何処に行ってしまったのか分かりませんでした。

ちょうどその時。

王子が愛馬にまたがりやって来ました。

「久しぶりに様子を見に来てみれば……何事だ？」

王子は平然とそう尋ねました。まるで白雪姫を預けに来た時以来だ、と言わんばかりに。

「お…王子……」

対する小人達は大慌てです。何しろ王子から預かっていた大切なお客人を、こんな事にしてしまったのですから。

王子の視線が小人達からガラスの棺へ、そして中にいる白雪姫へと移りました。王子の顔がみるみるうちに曇ります。小人達は青ざ

め震えだしました。

「何という事を……何という事をしてくれた！」

馬を降り、そう叫びながら棺に近寄る王子の演技は迫真の物でした。

「貴様ら！只では済まさんぞ！！」

激怒する王子を前に、小人達は小さく丸くなるしかありませんでした。

このままこいつらも始末してしまおうか。

そう思い、王子が小人達を見回すと。

1、2……6人。6人だと？

「……おい、一人足りないではないか」

王子は眉を潜め大声をあげました。

「あいつは何処へ言った！」

あの、一人家に残っていたあいつは。白雪姫が生きている事を知っているあいつは。反抗的な目で私を睨んでいたあいつは何処だ！

「――ここにいる」

その彼は、王子の背後に立っていました。

グランピーは森の入り口に立っていました。王子は冷ややかな表情で問います。

「お前、何処へ行っていた？」

「自分の国にだ。生まれて初めて行ったよ」

グランピーはいたく落ち着いてそう答えました。

「……何をしに」

「状況を知りたかったからだ」

多くを話さぬグランピーにイライラしながら、王子は思い出しました。彼に言った自分の些細な言葉を。

『もうすぐ静かで穏やかな平和が来るから』

なるほど。自分達は毎日を静かに、穏やかに、平和に暮らしているのにと。何故王子である私がそうではないのかと。こいつは不審に思ったのだ。

ぎり、と歯をくいしばり、王子は更に聞きました。

「その馬は何だ。馬など乗った事もないくせに」

グランピーの横には一頭の毛並みの良い馬がいます。

「借りた。乗れた」

「誰にだ！！」

冷静で無表情のグランピーに苛立ちは限界を越え、王子は額に青筋を立てて怒鳴りました。

「……この御方に」

グランピーは少し、本当にほんの少しだけ、微笑を浮かべました。自国の王子すら敬わなかった彼が、そう言って頭を下げ、更には道をあけました。

そこに姿を現したのは再び一頭の馬。その上で手綱を引く一人の召し使いの格好の男。そしてその男に抱えられるように、何とか馬にしがみついている、重症を負った白雪姫の父でした。

◇◇◇

もうずいぶんと長い間、こうしている気がするけれど…私はいつから目を閉じたままだっけ。いつから意識がなかったっけ。

このままフリを続けていれば、本当に死んでしまえるかしら。消えてしまえるかしら。

おかしいわ。私はこれから王子様と幸せになるのに。邪魔なものは何もないのに。

なのに何故だか体が重くって、動きたくない。このまま命を終わらせてしまいたいとさえ感じてしまう。……何故だろう。

――私は本当に幸せなのかしら。

ねぇ、誰か私を起こして。この暗闇から連れ戻して。

『白雪姫』

名前を呼んで。幸せなんだって思わせて。一人では…現実の世界に戻るのが怖い。

『白雪姫』

何だか外が騒がしい。たくさんの人の気配がする。

『白雪姫』

私の名を呼ぶのは誰？流れた涙を受け止めてくれた、この暖かい手は誰のもの？

私の王子様は……――

濡れた瞼を開いた白雪姫が最初に見たのは、自分の頬に手を置き覗き込む、仏頂面の、けれどもどこか安心出来るグランピーの姿でした。

◇◇◇

棺の中の白雪姫は、本当に死んでしまったのではないかと思うほど青ざめ、衰弱して見えました。何度呼びかけても反応がありませんでしたが、そのうち閉じた瞳から一粒の涙が溢れました。
グランピーはその煌めく雫を受け止め、白く冷たい頬に触れました。

とても眩しそうに、細く目を開けた白雪姫を見て、グランピーはホッと胸を撫でおろしました。どう考えてもそうは見えませんが、この時彼は笑ったのです。安心と愛しさが押し寄せてきたからです。

グランピーは白雪姫から手を離しました。

「大丈夫か？」

そう話しかけると、白雪姫はそっと体を起こしました。
頭が回らない。フラフラして体が重たい。

白雪姫は働かない頭を抱え、うつ向いたままです。

「家で休むか？」

グランピーの言葉の背後からの絶え間ない騒音が、彼女の頭に響きます。ぼぅっとした頭ではちゃんと聞き分ける事ができません。

「な…んの音……」

遠いようで近い。多数の人の気配。馬の蹄の音。何かを叫ぶ声。
次第に意識がはっきりしていき、頭に入ってくる音の正体。ぼやけた視界が晴れていき、その顔を上げると。

周囲を囲む無数の人だかり。それは皆、祖国の武装をした兵隊達でした。その中の一人が叫びます。

「白雪姫様！御無事でございますか！？」

その方を見やる白雪姫の目に映る懐かしい姿。父は馬の上で笑っていました。

白雪姫は駆け寄り泣きました。二度と会えないと思っていた父にすがりつきました。王は弱りきっていましたが、愛娘の元気な姿を見て安堵の表情を浮かべました。

国の王女を危機に追いやった以上、これは戦争です。王は国の誇る全ての戦力を総動員させてやってきました。縄で縛られ引かれてゆく王子は、もうどこにもあの威厳はなくただただ惨めでした。

突然起き上がった白雪姫に驚いた小人達は、グランピーに詰め寄り事情を問いただそうとしました。けれど言葉足らずな彼の下手くそな説明に、途中で諦めたようでした。

王子の目論見は後ほんの少しの所で失敗に終わりました。たった一人の、小っぽけな小人のせいで。

１０．白い鳥（前書き）

１年以上ぶりに投稿します。あと２話で白雪姫は完結します。ここまで読んでいただき本当にありがとうございました。

10．白い鳥

「――その後、白雪姫は王と国に帰りました。王は重症でしたが無事回復し、今は穏やかな毎日を送っています」

エレナはすぐに言葉を繋ぐ事が出て来なかった。唖然とテルを見つめ続けていた。

「すみません。長くなってしまいました…」

ふぅ、と息をつく。そしてテルはにっこり微笑んだ。何から口にすればいいのか分からなかったが、震える体をぎゅっと抱きしめ、エレナはようやく言葉を絞り出した。

「森一つ向こうの国は…どうなったの」

「滅びました。けれど民達はあなたの国が面倒を見ています」

「小人達はどうしているの？」

「同じ場所で変わらぬ生活を続けています。王は城に住むよう誘いましたが、彼らはそれを断りました。白雪姫はよく遊びに行っていますよ」

「白雪姫は……幸せなの？」

そこまで聞くと、テルは黙ってしまった。黙って、何かをじっと考え出した。そしてぽつりと呟く。

「例えば」

それは何とも分かりづらい例え。

「白雪姫のジグソーパズルはほぼ完成しているのですよ」

エレナは目をしばたいた。突然何を言い出すのかと。思っても見なかった回答に戸惑った。

「いくつものピースをはめ込んだ。ただ1ピース、足りないだけなのです」

テルは全く気にせず続ける。

「けれどそのたった1ピースが足りないせいで、売り物にもならない。飾る事も出来ない。それどころか、何が描かれているかすら分からない」

「1ピースだけで？」

テルはこくりと頷く。

「何故なら、最後の1ピースがとても大きかったからです」

そしてエレナを見た。

「大切だと思える、多くの人を、ものを、想いを、白雪姫は持っているのに、ただ一つ足りないせいで、彼女は今幸せとは言えないのです」

「私は・・・」

煮えきらないエレナから視線を外し、テルは立ち上がった。そして出入り口の扉を開ける。夜中になったのだろうか、外は真っ暗な闇に包まれていた。

爽やかな夜風が部屋に流れ込み、エレナの髪を揺らす。彼女は立ち上がると外へと歩み出た。心地よい涼しさに、エレナはモヤがかった心が晴れてゆくような気がした。

その時、ぴぃっという鳴き声がして、エレナの肩に一羽の小鳥がとまった。暗闇の中でも分かる、真っ白でふわふわの羽毛に覆われた小さな鳥。怖がる事なく大人しく彼女を見つめている。

「あなたの案内人です。その子が正しき所まで導いてくれるでしょう」

テルはそう言い柔らかく微笑んだ。白いシャツと青い髪が風にさらさらと揺れていた。

◇◇◇

エレナは森を歩いた。小鳥に導かれるまま、一本道が続くまま。

『あなたの話が本当であるか、確かめに行かなくてはね』

そうは言ったものの何故か彼が嘘をつくとは思えなくて。

『ありがとう。私もう一度王と白雪姫と話をしてみます』

ありがとう。その勇気をくれて。

『またお邪魔してもいいかしら？お代はその時にお支払いします』

おいしい紅茶とお料理を頂いたもの。けれど彼は笑顔のまま、首を振って確かこう言った。

『いいえ、お金なんか僕の店では必要ありません』

そんな訳はないでしょう。お礼はきちんとしなければ。

『いけません。今度は家族を連れてきますから。必ず伺いますから』

彼は笑ってこう言った。

『またのお越しを心よりお待ち致しております』

――来た時と同じ、まるで前々から準備をしていたように、そう言うのが決まりであるかのように。彼は丁寧に頭を下げた。

小鳥が飛んでゆく方へとついてゆくと、森へと続く一本の道があった。家の正面玄関を目の前にしてちょうど左側。来たときは全く気付かなかったが、森へと続く道はそこだけだった。

『必ず、また来ます』

そう言い残して森へ入った。テルは笑って手を振った。

彼には分かっていた。けれどその言葉だけで嬉しかったので、あえて口にはしなかった。今までもいろんな人がここを訪れた。皆また来ると言い残したまま、誰も来てはくれない。それは彼らが皆幸せだと言う事なのだろう。だからそれでいいのだ。それがテルの役目なのだから。

◇◇◇

ほんの数分。暗い森の道を歩き続けていると、辺りは徐々に明るくなってきた。それに伴い道は少しずつせばまっていき、遂には全く無くなってしまったが、繁る草木の量も質も穏やかなものに変わっていたので、何の問題もなかった。

すっと森を抜け出た。眩しくて手を目の前にかざした。

辺りを見回し考えてみる。ここはどこだろう、と。そしてしばらくの後ハッと気づく。目を見開く。息を飲む。全身がよだつ。

そこは一軒の家の裏側。小さく古く、簡易に作られた小屋のよう

な家の、真裏側に出たようだった。
エレナはそれを知っている。裏側からでも見て分かる。
少し開いた窓の向こうから、白い湯気と共に甘い林檎の香りが漂っていた。

◇◇◇

「幸せの色は人それぞれ……エレナさん、どうか御幸せに」
そう呟き微笑むテルの周りを、色とりどりの小鳥が飛び交っていた。
「さぁお次のお客様はどのような方でしょうか」
そう言って森の向こうに目をやると。がさがさという音と共に。
今日も幸せに迷った誰かが、森をかき分けやって来るでしょう。

◆
◆

とある世界のとある国、その中でも一際小さく地図にすら乗らないどこかの村に、名も無き大きな森があるそうです――

◇◇◇

「お母様、本当にこの道なの？」

「大丈夫よ、そんなに遠くないわ」

「しかしもう3ヶ月も前だろう。エレナ」

「小鳥が導いてくれるわ。ただ失礼な事にお名前を忘れてしまって…」

「ここ辺りの森は知り尽くしていますが…この先には何もありません」

「本当？グランピー……あら、戻って来ちゃった」

――けれども彼らが再びその場所を訪れようとしても、二度と見つけることは出来ません。
彼の名前を忘れ、容姿を忘れて。
最後にはあの場所に関する全ての記憶がなくなるでしょう。
残るのは白いただの小鳥だけです。

◇◇◇

「お母様、アップルパイが出来たわ」

白雪姫の呼び声に振り返ったお妃様は、今日も笑顔でした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。
白雪姫は完結しましたが、物語自体はまだ続きます。おおかみ少年や人魚姫、不思議の国のアリスなど。テルのもとへ現れる、さまざまな悩みを抱えた訪問者との会話を通し、彼の正体や自身が負っている心の傷を癒してゆく物語です。
ただ、書かせてもらう場所を一か所にしたいと思うので、小説家になろうは一旦停止させていただくつもりです。まだ読んでくれている方がいるとも思えないのですが、一応報告させていただきます。

拙い文章でしたが、届けられた感想やメッセージにはとても感謝しています。たくさん支えられました。
ありがとうございました（＾ｖ＾）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8471c/

◇夢色童話◇

2010年10月14日13時39分発行